

海を渡るアサギマダラ(Ⅱ)

登 日 邦 明

海を渡るアサギマダラの概略は、昆虫と自然むしべん特集号に投稿済であるが、ここではその時の状況を、もう少し詳細に記録しておきたい。

本文に入るに先立ち、貴重なデータを提供された、洲本市の坂口 操氏に厚くお礼申し上げたい。尚、標本は、筆者が保管している。

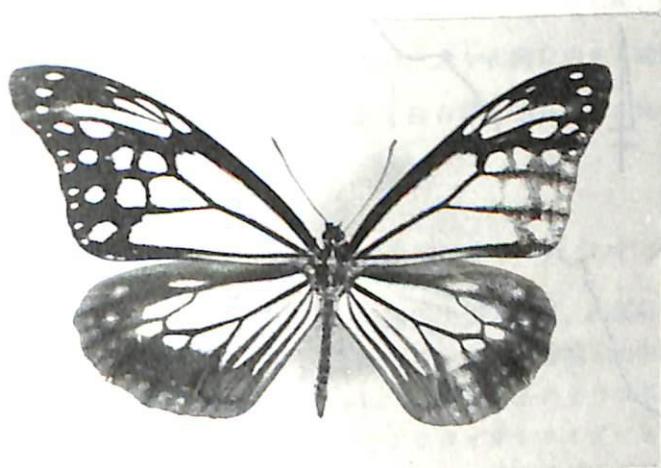


Fig.1. 洲本市安乎沖の海上で採集されたアサギマダラ
Palantica sita nipponica Moore ♂

1977年7月16日午後、坂口 操氏は愛用のモーター・ボートに乗って、魚釣りをしている友人と待ち合わせていた洲本市安乎海水浴場へ行ったが、合うことができなかった。そこで氏は、やむを得ず洲本市古茂江のサントピア・マリーナに向けて、島の沖合いおよそ2kmのところを航行中(Fig. 2参照)、海面上0.5~1mのところを弱々しく飛翔している蝶を発見した。しかしネットを持ち合わせていなかったので、船を何度も旋回させて、タオルで船内に叩き落して採集しようと試みた。氏の談によると、1頭の蝶に10数回船を旋回させ、合計8頭あまりの蝶に次々と挑戦し、このうち2頭を船内に叩き落すことに成功したが、うち1頭はその後逃げられてしまった。また、叩き落すのに失敗すると、蝶は5mあまり飛び上がったが、すぐ下に降りてきたとのことであった。

この蝶は、アサギマダラ *Palantica sita nipponica* Moore の♂で(Fig. 1)、安乎-古茂江間の航路上で、淡路島に向かって飛翔している本種を合計10数頭目撃したという。また、これらすべての個体が、いずれも同じ方角に飛翔し、タオルで捕獲するためにモーター・ボートで追

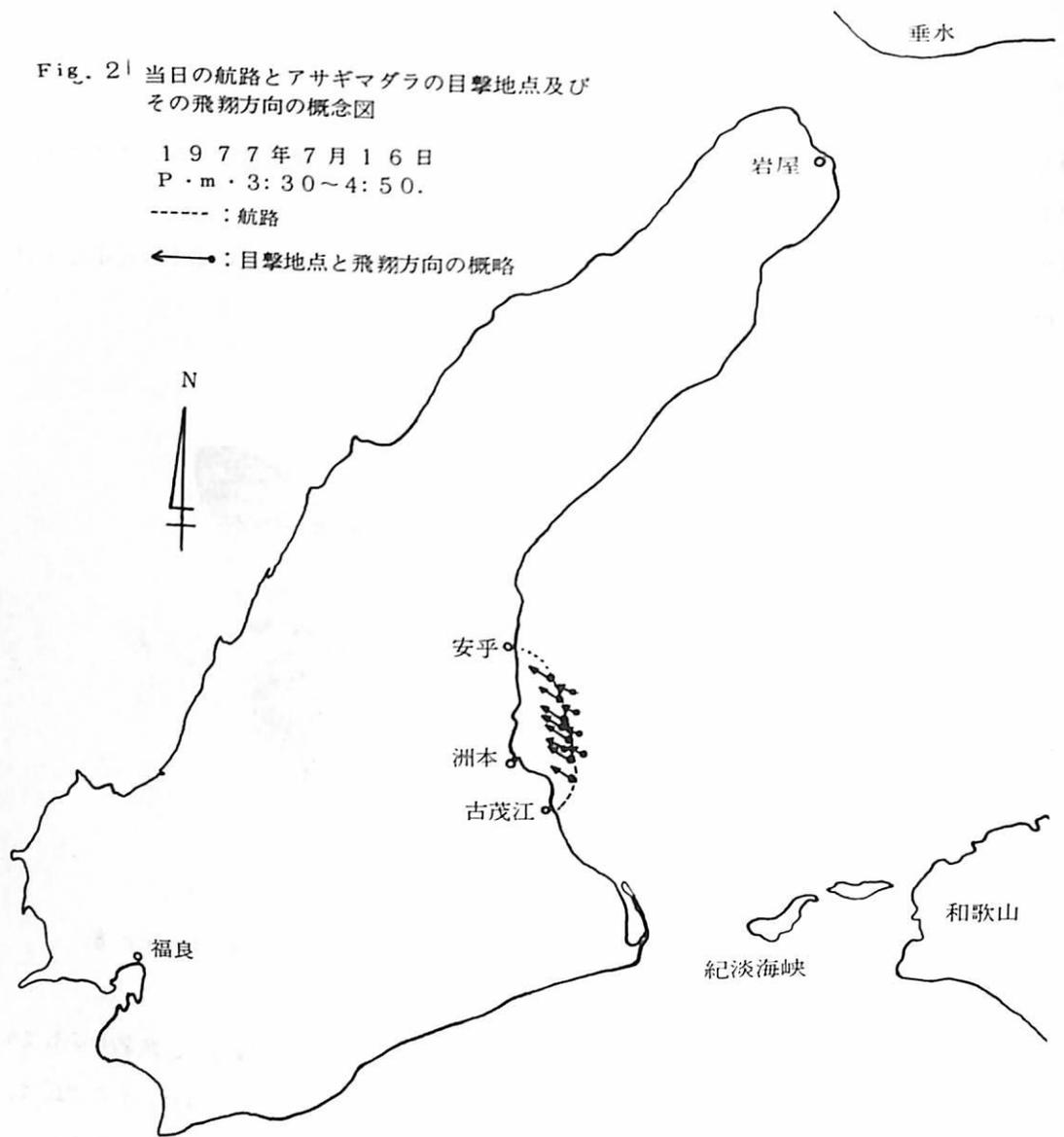


Fig 2.

い廻した後も、その方角は変わらなかったそうである。もちろん、当日の天候は晴れで、風もほとんどなかったとのことである。

これらのアサギマダラは、恐らく和歌山平野あたりから高温を避けるために紀淡海峡を渡ってきたものと推定されるが、安乎-古茂江間の7~8kmのほぼ直線の航路上でこれだけの数を目撃できたのであ

るから、この日、この海域を、和歌山市方面から淡路島に向かって飛翔していた個体数は、膨大なものになると考えられる。

元来アサギマダラは、独特の飛翔力によって、移動性・分散性の強い種とされているが、なぜ集団で移動をするのか？ また、前述のように、仮に移動は高温を避けるのが目的であるとした場合、なぜ距離的に近い背後の山地に移動せず海を渡るのか？ また、これらの蝶は、淡路島を目ざして渡ってきたのか、あるいは淡路島を中継地としてどこかへ飛んでいくのか？ さらに、なぜ風もないのにすべての個体が同一方向に飛んで行くのか。まして、なぜ捕獲するために追い廻した後もその方向が変わらないのか……など、興味は尽きない。

四方を海に囲まれた淡路島に住む我々にとって、今回のアサギマダラをはじめ、従来より知られている何種類かの海を渡る一渡りをする一昆虫類の研究は、大いに興味のある課題である。

今後、同学諸兄の協力によって、これらのメカニズムが1日も早く明らかにされることを期待したい。

アキグミの花に集まるクロフオオシロエダシヤク

1977年4月29日午前10時過ぎ、植物研究家の榎賀正夫氏と共に、南淡町灘山本から論鶴羽山に向けて登っていた途中、山本の集落を過ぎ、2Kmあまり登った論鶴羽山中腹の登山道脇に、アキグミ *Elaeagnus umbellata* Thumb. の樹高3mあまりの木があり、白色の花が満開であったが、その花にハチ、アブ類に混じってクロフオオシロエダシヤク *Pogonoprgia nigralbata nigralbata* Warren が、4個体吸蜜しているのを目撃した。しばらく観察している途中で、飛び立った個体もあれば、どこからともなく飛来して吸蜜を始める個体も見られた。

尚、当日の天候は晴れで無風、クロフオオシロエダシヤクの吸蜜姿勢は、先の吸水の例(本誌No16)と同じで、翅を広げたままであった。(登日 邦明)

洲本市池ノ内・猪鼻にアカシジミ産す

従来、淡路島でのアカシジミ *Japonica lutea* Hewitsonの記録は、藤平 明氏によって南淡町阿万から採集されているだけであったが、筆者は、1977年5月27日午後、松喰虫の被害調査のため洲本市池ノ内の洲本カンツリー・クラブに出掛けた際、同クラブのゴルフ・コース端のコナラの林で、数頭の本種を目撃し、そのうちの1頭を採集した。

また、2日後の5月29日午前9時30分すぎ、洲本市猪鼻ダム上流で行なわれた探鳥会に参加した際、*Quercus* の葉上に静止していた本種を目撃した。

これらの例から、本種はこの山系に広く分布するようであるが、一度詳細に調査をする必要があるだろう。

尚、上記の標本は、筆者が保管している。(登日 邦明)